書誌から見た日本ワイルド受容研究
―翻案『乳母車』を巡って―

佐々木　隆

プロローグ

書誌研究あるいは受容研究は、新しい資料の発見と共に研究が常に更新されるため、完成しない研究という宿命がある。「新しい資料」の発見とは、その資料が初めて発見される場合もあれば、すでに存在は明らかではあるが、視点として新しい発見があったという２点に大別される。今回本稿で取り上げる室多良男（良雄）「喜劇　乳母車」は後者にあたる。

1　発見の経緯

私はこれまで日本のシェイクスピア受容研究とワイルド受容研究に取り組み成果を継続的に発表してきた。(1) シェイクスピアの受容研究の一環から坪内逍遙（1859-1935）のリサーチをしている際、平田耀子「坪内逍遥による本間久雄宛書簡について―年未詳書簡を中心に―」（2005）の文中に以下のように記載があることから始まった。

> 書簡【Ｃ一九一、年不詳三月二二日、逍遙、本間（君）、お送りの小為替たしかに入手いたしました】の主な内容は、長崎の浦瀬白雨（七二郎）より、Wilde の *The Importance of Being Earnest* の翻案「乳母車」の『早稲田文学』への掲載依頼があったので、その原稿を送るという要件である。この書簡が送られた日付は『補遺』によれば大正一二年三月二二日となっているが、『逍遙日記』の記述に照らし合わせると三月二日である可能性があり、書簡【Ｃ一六八】にあたる封

筒に入れられたのであろう。ちなみに「乳母車」は、『早稲田文学』第二一二号、大正一二年七月号と八月号に掲載されている。(2)

平田は本間久雄(1886－1981)の孫にあたり、ここ数年、本間久雄に関する研究論文等を発表している。本間と坪内は早稲田の同門であり、『早稲田文学』に携わっていた。特に、本間は早くからオスカー・ワイルドへの研究に取り組んでいた背景もある。

2　「喜劇　乳母車」

「喜劇　乳母車」は「室多良男」の名前で『早稲田文学』(第212号、東京堂書店、1923年7月)に掲載され、続いて「室多良雄」の名前で第213号でも掲載されている。早稲田文学総目次データベースでは著者名として「室多良雄」で統一されている。この作品はOscar Wildeの *The Importance of Being Earnest* の翻案である。

第212号では逍遙の「口上」が掲載されているが、ここにはOscar Wildeの *The Importance of Being Earnest* 明記されていない。まずその冒頭は以下の通りである。

> コメデーの品質は其國の文化の尺度だといはれる。わが劇壇は新代作家の輩出によつてめつきり進境を現じて来たが、コメデーはまだどうも振はない。時代思潮の然らしめる所とはいへ、現下のわが社会には健全な笑ひが餘りに乏しい。(3)

さらに次のように記されている。

> 翻譯は、其譯語が直譯的に生硬であるために、或初心の読者には、却つて清新であるかの如く、奇跡警であるかの如く、

若しくは如何にも外國情調が豊かであるかの如く誤解されて歓迎されることもある。翻案に至つてあ、それがバタ臭くなく巧みに引直されゝば、恰も其比例に、平凡視されたり、新派や舊派や曽我の屋のそれらと同視されたりする虞れがある。本篇は其原作其物が軽い物であるだけに、さうして其翻案ぶりが老巧であるだけに、或はさう速断される遺憾がないともいへない。私が一應口上ひひの役目を勤める所以である。(4)

Oscar Wilde の *The Importance of Being Earnest* であることは第 213 号の最後の所にカッコ書で記されている。

Oscar Wilde の The Importance of Being Earnest.を翻案したものです。全然風俗習慣を異にした外國喜劇を文字通りに翻譯するより、翻案にした方が却て劇的効果が得られはしないかと云ふ考から思立つた私の拙劣な試みに過ぎません。幸に大方の寛怒を希ひます。(5)

ここで *The Importance of Being Earnest* と「乳母車」の対応関係をまとめておきたい。

The Importance of Being Earnest／「乳母車」		
時代設定	現代（19 世紀末）	現代
場所	東京麹町區三番町	ロンドンの西区ハーフムーン
大澤日比彌（秋元實雄と称して）		ジョン・ワージング（ジャック）
足立茂（東京なる日比彌の友人）		アルジャノン・モンクリーフ（アルジー）
太田原辰野（足立茂の伯母）		ブラックネル夫人（オーガスタおばさん）

けいこ（辰野の娘）	グエンドレン・ファエファックス
杉原いち子（せつ子の家庭教師）	ミス・プリズム（家庭教師）
下野六平太（大澤家々扶）	チャ
禮三（足立茂の僕）	レイン
まつ（大澤家下婢）	
せつ子の英語の勉強	セシリーのドイツ語の勉強

翻案の題名『乳母車』についてはプリズムが乳母車に原稿を入れ、旅行鞄に赤ちゃんを入れた台詞を見れば、納得のいくところである。

Lady Bracknell, I admit with shame that I do not know. I only wish I did. The plain facts of the case are these. On the morning of the day you mention, a day that is for ever branded on my memory, I prepared as usual to take the baby out in its perambulator. I had also with me a somewhat old, capacious hand-bag in which I had intended to place the manuscript of a work of fiction that I had written during my few occupied hours. In a moment of mental abstraction, for which I never can forgive myself, I deposited the manuscript in the bassinette, and placed the baby in the hand-bag. (6)

奥様、お恥ずかしい次第ですが、私にもわかりません。私だって知りたいのです。ありのままを申し上げますと、こうなのです。今、奥様がおっしゃたあの日、私にとって一生忘れられないあの日の朝、私はいつものように乳母車に赤ちゃんを乗せて外出する支度をいたしました。そのとき、

仕事のあい間を利用して書いた小説の原稿を入れるつもりで、少し古くなった大きな旅行カバンを一緒に持って出たのです。ところが、ちょっとぼんやりしていた間に、みんな私が悪いんですけれど。原稿の方を乳母車に入れ、赤ちゃんは旅行カバンに入れてしまったのです。(7)

翻案『乳母車』は大澤日比彌は乳母車で発見されたことになっている。

足立　伯母さん日比彌君は日比谷公園で発見されたんですよ、まア暫時落付いて説明をお聞きになつたらいゝでしやう。
大澤　而も此の乳母車の中でゝす。
（中略）
杉原　自殺してお詫びいたします。（あと駈け出さんとする。）
大澤　ま、あ、待つて下さい。（と引き留め）あなたが私を捨てたのには何か理由があるのでいやう。
杉原　はい、あの学問に凝りましたばかりに・・・・・・・
大澤　さうですか、夫れ丈では判然しませんなア、僕を捨てれば学資金でも出すと云ふ人があつたんですが。
杉原　別に坊様をお捨て申したわけではございません、實は日比谷公園でお守りをしてをりながら、つい本の方に気をとられまして。(8)

原作とは若干異なるところがあるが、取り違えるところ、そして家庭教師が勉強好きなところなどは同じ設定である。

杉原はこのあと「学問が捨てられませんので、又東京に出ました西洋人の家へ奉行いたしました」と言うなど、まさに「新しい女」の姿を示しているとも言えるだろう。

ラストでは足立茂とせつ子、大澤日比彌（秋元實雄）とけい子、杉原いち子と下里六平太の3組の結婚で幕となる。

3　*The Importance of Being Earnest* の日本の受容史概観

どの作品も翻訳される前には紹介という形で登場して来る。*The Importance of Being Earnest* も例外ではない。この時に気になるのが、作品名をどのように紹介するかだ。小山内薫（1881 - 1928）は、明治41年(1908)5月の『読売新聞』(5月17日)に「オスカア・ワイルドに就て」と明治45年(1912)1月の『演劇新声』（東雲堂）に「オスカア・ワイルドの諸作」という文章を発表している。

「オスカア・ワイルドに就て」はワイルドに関する評論を紹介している。

> 僕の讀んだ脚本と云ふのは、『キンダアミア夫人の扇』“Lady Windermere's Fan”と『眞面目なる事の必要』“The Importance of being earnest”とだ。評論と云ふのは伊太利人マリオ、ボルザの著『今日の英國劇』の英譯第八十四頁から第九十五頁までだ。(9)

「オスカア・ワイルドの諸作」では次のように紹介されている。

> 劇として『つまらなぬ女』は『キンダミア夫人の扇』“Lady Windermere's Fan”はど好くない。『理想の夫』“An Ideal Husband”は前両者の何れにも及ばぬ作だ。『眞面目なる事の必要』が四つの中では一番好い。ワイルドの劇にはきつと扇とか手紙とか手提嚢とかが出て来る。それに依つて何者かが現れれてゐる。それが元で何者かがきつと罪を着ることになる。(10)

本格的な紹介は、岩野泡鳴（1873-1920）により明治 42 年(1909)2 月の『早稲田文学』（第 39 号）には『熱心の大切な事』の梗概が発表されている。

> ワイルドの社会喜劇著作順序から云ふと、さきに解説した『キンダミヤ夫人の扇』から、今云はうとする最終喜劇に至る間に、『大切ならぬ婦人』(The Woman of No Importance)と『理想の所天』(The Ideal Husband)とがある。その前者は、レオナルドクレスエルイングレビが「稀有な美の文句と感ずべき悲哀の動機に満ちてゐる」と讃した作だし、後者は、ベルナルドシヨウの皮肉な筆が『渠はその批評家等を愚にする特性を持つてゐるから、危険な題目だ』と云つた作だ。いづれも例の警句が出て来る対話劇。(11)

ワイルドの戯曲については明治 41 年(1908)7 月の是影生「オスカー・ワイルドの戯曲」が比較的もとまって紹介しているが、梗概として戯曲を紹介したものは、『サロメ』を除けば、泡鳴の紹介はかなり本格的なものとなろう。本格的なワイルド論として知られている明治 44 年（1911）3 月の本間久雄「オスカア・ワイルド論」（『早稲田文学』第 62 号）では残念ながら作品として *The Importance of Being Earnest* は紹介されていない。

日本で最初の *The Importance of Being Earnest* の翻訳は 1912 年 2 月 25 日～3 月 13 日に連載され森皚峰訳「喜劇『手提鞄』」（『時事新報』）である。「手提鞄」の冒頭を紹介しておきたい。

> 本篇は Oscar Wilde の Importance of Being Earnest を譯し

たるものなり。題すでに人名 Earnest との地口を為し居れり、斯くの如き到底邦語に譯し難き例、往へ本文中にも存し居れど、結構の面白さを取りて、大略原文の儘に譯し出せり。地名、人名には假に日本のを當てたれども、風俗人情は凡て原作英国の儘なり。」(12)

その後は谷崎精二訳『真面目なる事の必要』(矢口達監修『ワイルド全集』第3巻、天佑社、1920 年 5 月) ということになろうか。上演においては 1973 年 6 月の荒井良雄訳・演出『真面目が大切』(近代座：砂防会館ホール) まで残念ながら応援の記録は見当たらない。

エピローグ

『サロメ』以外のワイルド劇上演は戦後になってからようやくなされるようになったと言っても過言ではない。その意味で、翻訳や翻案は受容上重要な意味を持つこととなる。特にコメディ・オブ・マナーズが日本で上演されることは、戦前はかなり困難であったことは想像のつくところである。

今回の調査では *The Importance of Being Earnest* の翻案『乳母車』の上演までは至らなかった。戯曲は上演されて初めて本来の目的を達成することとなる。しかし、受容上、翻案は文化の違いをどう受け入れるといった問題にも当てはまる。

注

(1)　書誌としては以下のようものを発表している。

<u>シェイクスピア</u>

『日本のシェイクスピア』（エルピス、1983 年 2 月）
『日本シェイクスピア総覧』（エルピス、1990 年 4 月）
『日本シェイクスピア総覧 2』（エルピス、1995 年 4 月）
『シェイクスピア研究資料集成』（高橋康也監修／佐々木隆編）（全 30 巻＋別巻 2、日本図書センター、1997 年 1 月～1998 年 6 月）
『シェイクスピア大事典』（共著）（日本図書センター、平成 2002 年 10 月）
『CD-ROM 版日本シェイクスピア総覧』（エルピス、2005 年 3 月）
『日本シェイクスピア研究書誌（平成編）』（イーコン、平成 2009 年 4 月）

ワイルド

『オスカー・ワイルド事典』（共著）（北星堂書店、1997 年 10 月）
『日本ワイルド総覧』（イーコン、2007 年 2 月）
『日本ワイルド総覧（増補版）』（イーコン、2008 年 2 月）
『日本ワイルド研究書誌』（イーコン、2009 年 2 月）

(2) 平田耀子「坪内逍遙による本間久雄宛書簡について—年不詳書簡を中心に—」（『人文研紀要』第 55 号、中央大学出版部、2005 年 10 月）, p.54.
(3) 室多良男「喜劇　乳母車」（『早稲田文学』第 212 号、東京堂書店、1923 年 7 月）, p.110.
(4) Ibid., pp.110-111.
(5) 室多良雄「喜劇　乳母車（承前完結）」（『早稲田文学』第 213 号、東京堂書店、1923 年 8 月）, p.40.
(6) *Complete Works of Oscar Wilde* (Collins, 1990), p.378.

(7) 荒井良雄編『ワイルド喜劇全集』(新樹社、1976 年 12 月)、p.406.
(8) 室多良男「喜劇　乳母車」, pp.31-34.
(9) 小山内薫「ワイルドに就て」(『読売新聞』(5 月 17 日、1908 年)
(10) 小山内薫『演劇新声』(東雲堂、1912 年 1 月)、p.138.
(11) 石崎等「岩野泡鳴」(山田勝編『オスカー・ワイルド事典』北星堂書店、1997 年 10 月), p.74.　要確認
(12)森皚峰訳「喜劇『手提鞄』(『時事新報』1912 年 2 月 25 日～3 月 13 日、時事新報社)

キーワード：ワイルド、真面目が肝心、乳母車、翻案